

東日本大震災に遭遇して その2 幸運な救助で鮎川へ

1. 津波記念碑

南北両方向から押し寄せた二つの津波の激突によって超巨大化した津波が避難した 50mほどの高台に迫って来たので、さらに上の神社付近まで駆け上った。その地点から少し低い 60m弱の地点に「大震嘯災記念碑」と書かれた石碑がある。以前は書いてある内容にはあまり気に留めなかったが、津波が収まってから読んでみると、これは昭和 8 年 3 月 3 日の昭和三陸沖地震の折、津波がこの地点まで到達したことを示すために建立されたものであり、「地震があったら津浪の用心」「それや来た逃げよう五本松」と刻まれていた。地震が来たら津波を用心せよ、津波が来たら五本松の高台を目指して逃げよ、という教えを書いたものだ。我々の避難行動は結果的にはこの教えに適っていたのだ。こうした碑は三陸各地にあるが、大きな津波がここまで上ってきたという津波の恐ろしさを知らせる警報の役割を果たしている。東日本大震災に関しても当然必要なことであると思う。

2. 黄金山神社への避難

命拾いをした我々だが、次は孤立状態になったこの島でどのように対応していくかという問題に直面した。何日間も野宿というわけにはいかない。何はともあれ、黄金山神社を頼ることにした。神社では参殿の前に立っていた石鳥居は根元から倒れ、灯籠などもことごとく崩れ落ちていた。宮司はじめ神社職員の方々は、復旧に追われていたにもかかわらず温かく迎え入れ、祈祷者待合所に宿泊させてもらえることになった。待合所は割れたガラスが廊下一面に散乱し、壊れた祭壇や落下した掲額などが部屋中を覆っていた。それらをまず片付け、拭き掃除をしてどうにか暗くなる前に寝場所をつくり出した。いつ再び起こるか分からない地震に備えて、畳の部屋もすべて土足が許された。宿泊者用の立派な寝具を使わせてくれ、夕食もおにぎり 2 個に豚汁という、避難所としては破格の厚遇であった。まさに地獄に仏であった。感謝に堪えない。

夜になっても震度 5~6 程度の余震が何度も起きた。地面から沸き上がる唸りのような音や、瓦が激しくぶつかり合うガラガラ...という音が暗黒の建物中に響き渡り、強い揺れ以上に恐怖だ。まだまだ予断の許されない状況だった。我々 11 名は比較的 안전한状態におかれると、船で沖に出た 2 人の仲間のことを心配し合った。がけ崩れ最中の津波避難だったが、我々は正しい判断をしたと全員で語り合った。神社の配慮で終始ラジオがついていたので、不安の中みんな一晩中耳を傾けていた。しかし、牡鹿半島の「お」の字も出て来なかった。ましてここ金華山は外界との交信はまったく途絶えているので、完全に孤立状態であった。この島に救助の手が差し伸べられるのはかなり先のことであろうと、長期逗留を覚悟した。震源地に最も近い金華山だけに家族はどんなにか心配しているだろうと考えると、たまらなく心が傷んだ。連絡が閉ざされていることが何よりもどかし

った。

3. 金華山 大津波の爪跡

翌12日朝、神社職員と2人で神社周辺と棧橋付近の被害状況を調べに行った。神社付近の林の中にいる鹿たちは不安そうに身を寄せあっている。神社から棧橋までの道は、津波避難の時よりもさらに破壊が進み、岩や木が積み重なるようにして道を覆っていた。改めてよく命があったなあと思しながら岩や木を乗り越えた。幸運と適切な判断だけではなく、何か目に見えない大きなものに守られたのではないかとしみじみ感じた。棧橋付近の3つの建物はいずれも鉄骨やコンクリートの柱だけが残り、それにがれきやビニールなどが取り付いていて、水の怖さをまざまざと見せ付けられた。待合室の屋根やお土産屋の2階に上がらなくてよかったとつくづく思った。

4. 予期せぬ救出

我々は長期の避難生活を覚悟していたので、神社の一員という気持ちで積極的に仕事を手伝った。神社から100mほど離れた湧き水からの水の運搬、復旧作業、落下物の焼却などに精を出した。少しでもご神社の役に立てるかと思うと気分がよかった。

また一方では、見晴らしのよい高台に交替で立って船を見張っていた。翌12日午後2時ごろ、船着場の様子を見張っていた仲間が、「迎えの船が来るぞ！」と叫んで、息せき切って神社まで駆け上がってきた。さっそくりュックを背負って岩や倒木で埋まっている道を駆け下りた。地震が来ればすぐに避難できる身づくろいが出来ているので、とっさに行動が出来た。船から「津波が来るかもしれないので急いでください！」「明日以後は、お迎えに来ませーん！」と、ハンドスピーカーで叫んでいる。棧橋付近には大量の流木や車など色々なものが沈んでいるので、救援に来た船は近づけない。そのため小さなモーターボートで3人ずつ救援船までピストン輸送だ。仲間11名と他の観光客5名、計16名を乗せた船は鮎川へと向かった。船から見る金華山は驚くほどの崩落ぶりであった。よくぞ命があったなあとつくづく感じ、がけ崩れ最中の恐怖のシーンが次々に浮かんだ。そしてうっすらと涙が浮かんだ。船は沖に向けて快調に進んだが、いつ来るかわからない津波を警戒して船員も我々乗客も緊張し通しだった。鮎川に到着するまでは安心できないという気持ちだったが、一方では、思わぬ救出で予想より早く帰宅できるのではないかという希望が湧いて浮き立つ気分にもなっていた。

5. 無事だった船で避難した仲間

それだけに船で避難した仲間のことがことさら心配になり、出発してまもなく乗組員に安否を尋ねると、彼らが乗った船は昨夜一晩中沖を走り続けて今日の午前中に無事鮎川に上陸した。現在は石巻市牡鹿総合支所に避難しているはずだ。2人を下してから海の状況を見計らって迎えに来たとのことだった。これで13名全員の無事が確認されたのである。みんなで手を取り合って喜び合った。太平洋の大海原に出ると、海の色は津波前よりもずっときれいな青みを帯びている。だ

がこの海面のいたるところにがれきや仰向けになった船があちこちで波に漂っており、牡鹿半島の岸はおびただしい量のがれきで埋まっている。津波の被害がいかにか大きかったかを改めて痛感させられた。昨夜ラジオで「牡鹿半島は壊滅状態」と聞いていただけに、想像以上の悲惨な状況に遭遇するのが目に見えるようで恐ろしい気がした。

6 . 鮎川港へ上陸

鮎川の港湾に入ると、がれきの量がさらに増えてきた。船はがれきを避けながらゆっくりと進む。流出防止のフェンスで囲まれ、互いにつながれて停泊している船があちこちに見える。前日金華山に出発するときは、餌をねだって船の周りを群れ飛んでいたかもめの姿は全くない。我々の船は1キロほど沖でエンジンを停止させた。そこから岸壁までは金華山出発時と同様、ボートでのピストン輸送だ。遠方から見ると棧橋付近にはコンクリートの建物がいくつか見える。被害はラジオで報道されたほどひどくないのではないかと思えた。だが上陸してみると、残っていたのは鉄筋コンクリートの建物の外壁だけで、内部はすべて破壊されてがれきで埋まっていた。ひどい建物は鉄骨しか残っていない。前日歓迎してくれた鯨のマスコットは辛うじて残っていたがビニールや紙が絡み付き、それが風に揺れるさまはまるで幽霊が取り付いているようで不気味だった。鯨の町のシンボルが残っただけでもいいじゃないかと、無理に自分に言いかけながらもむなしさいっぱい、とぼとぼと棧橋から街の方向へ歩き出した。